

思春期の向社会的行動とメンタルヘルスの 発達の関連性の検討

研究代表者

国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科

竹内 瑠美

1. 問題と目的

平成 25 年上半期警察庁調べでは、非行少年の検挙人員が 2 万 7,038 人であったことが報告されている。(平成 25 年警察庁生活安全局少年課) 前年同期と比べて 13.2%減少となった。しかし、成人の人口 1,000 人当たり 0.9%の 4.2 倍と、引き続き高い水準である。

この減少傾向には、サポート体制の強化が 1 つの要因として考えられる。しかしながら、成人の人口比と比べ、未だ高い水準にある非行少年のサポート方法は、さらに検討し、その方法を模索していく必要があるのではないだろうか。

例えば、非行少年が行う問題行動の低減として、向社会的行動が注目され、心の思いやりの育成(向社会的行動の増加)が効果を挙げる可能性があることが議論されてきた(日本犯罪心理学会第 35 回大会 1997)。

また、非行少年は思春期にあたり、その時期は友人関係の影響が強くなり、学年が上がるごとにメンタルヘルスが低下することが示されている(荒木田 2003)。思春期にはメンタルヘルスのような心理的要因が行動に何らかの影響をもたらす可能性が考えられる。

そこで本研究では、問題行動低減としての向社会的行動に注目し、メンタルヘルスとの関連性を調査し、さらに保護司など地域や周囲の大人から受ける支援を模索することを目的とした。

2. 方法

研究 1 : 思春期生徒を対象に、向社会的行動及びメンタルヘルスの発達の関連性を検討。

対象 : 東京都 A 地区にある某公立小学校 2 校及び同じく A 地区にある某公立中学校 3 校の小学 5, 6 年生から中学生、総合計 694 名 (有効回答数 : 男子 356 名、女子 311 名) ; 小学校 5 年生 113 名 (有効回答者全体 109 名 : 男子 50 名、女子 59 名)、小学校 6 年生 122 名 (有効回答数全体 119 名 : 男子 62 名、女子 57 名)、中学校 1 年生 136 名 (有効回答数全体 136 名 : 男子 79 名、女子 57 名)、中学校 2 年生 185 名 (有効回答数全体 179 名 : 男子 94 名、女子 85 名)、中学校 3 年生 134 名 (全体 124 名 : 男子 71 名、女子 53 名)。

調査時期 : 小学生 5, 6 年生及び中学生 2012 年 8~10 月。

調査項目 : 学年、性別を調査し、質問紙法にて向社会的行動尺度 (西村ら 2012)、ソーシャルサポート尺度 (中学生用ソーシャルサポート尺度) (岡安ら 1993) と小学生用ソーシャルサポート尺度短縮版作成の試み (嶋田ら 1992) を参考にして作成、中学生用ストレス反応尺度 (岡安ら 1992) をそれぞれ 4 件法にて回答を得た。

「向社会的行動尺度」は、「家族因子」、「学校因子」、「地域社会因子」の 3 因子 16 項目で構成されている。それぞれの項目に対して、「したことがない」、「少しした」、「まあまあした」、「いつもした」

の4段階で評定を求めるものである。得点が高い程、向社会的行動を行っていると言われる。

「ストレス症状」尺度は「身体的症状」、「抑うつ・不安」、「不機嫌・怒り」、「無力感」の4つの下位尺度で各4項目である(全16項目)。4段階で評定され「全くあてはまらない」、「少しあてはまる」、「かなりあてはまる」、「非常にあてはまる」、のいずれかに回答してもらった。ストレス症状は得点が低い程、ストレスが少ないと言われる。

「ソーシャルサポート」尺度は、中学生用ソーシャルサポート尺度(1993)と小学生用ソーシャルサポート尺度(1992)を用い両質問項目を合わせて測定した。ソーシャルサポート尺度では、児童の倫理的配慮により「父親」と「母親」のサポート源を「保護者」とし、「友達」、「先生(教諭)」との3つの下位尺度(各5項目、全15項目)について、それぞれ4段階「ちがうと思う」、「たぶんちがうと思う」、「たぶんそうだと思う」、「きっとそうだと思う」で評定を求めてもらった。評定方法は中学生による自己評定であった。ソーシャルサポートでは得点が高い程、サポートを受けていると言われる。

分析方法：向社会的行動尺度とストレス反応尺度について因子分析を行った。ソーシャルサポート尺度では、「保護者」、「友達」、「先生(教諭)」との3つの下位尺度について信頼性の確認のため内的整合性を確認した。

それぞれの尺度とその構成因子別に合計得点の比較を行うため、性別と学年別の2要因分散分析を行った。被験者間効果の検定より、有意差が見いだされた場合は、Bonferroniの多重比較を行った。

また、各尺度及び構成因子の関係については、学年別にステップワイズ法による重回帰分析を行った。目的変数を向社会的行動尺度の各因子とし、説明変数は、ストレス反応尺度の各因子、保護者、先生、友達のソーシャルサポート尺度、性別をダ

ミー変数(男子=0, 女子=1)とした。

統計処理にはSPSS20.0for Windowsを使用し、統計的な有意水準は以下特別に明言しない場合は $p<.05$ とした。

研究2：思春期生徒と非行少年の向社会的行動の比較

対象：関東圏内にある某児童自立支援施設入所児童(以後、入所児童)87名(有効回答数87名男子60名女子27名)、平均年齢13.5歳(標準偏差1.6)、入所期間9.4ヶ月(標準偏差8.4)、図1、図2参照。

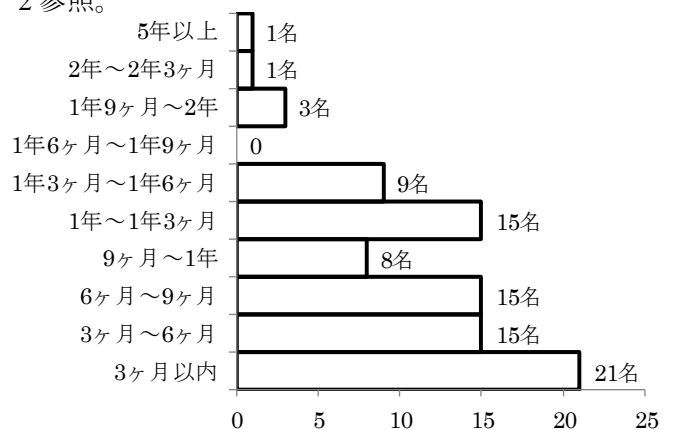


図1. 児童自立支援施設児童年齢別人数

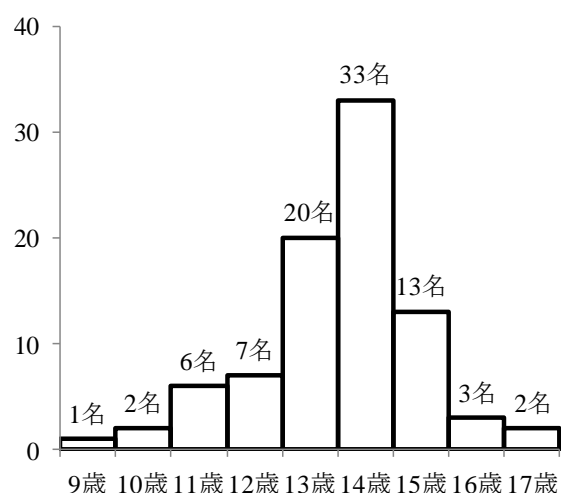


図2. 児童自立支援施設入所期間別人数

さらに、入所児童とほぼ同じ年齢で検証するため、研究1と同じ小中校生に高校生を加えた1027名(男子670, 女子329)を一般生徒とし比較した。高等学校は小学校と中学校同様の東京都内A地区

にある某工業高等学校の高校 1、2 年生 高校 1 年生（有効回答数全体 171 名、男子 161 名、女子 10 名）高校 2 年生（有効回答数 162 名（有効回答数 161 名、男子 153 名、女子 8 名）。

調査時期：高校 1、2 年生 2013 年 5 月。

調査項目：研究 1 と同様に小学 5 年生から高校 3 年生の属性は学年，性別を確認した。児童自立支援施設入所児童の属性では、年齢、性別、入所期間を調査した。

さらに、質問紙法にて向社会的行動尺度（西村ら 2012）と 共感性尺度をそれぞれ 4 件法にて回答を得た。

「共感性尺度」は、大山（2004）を用いた。15 項目からなる「はい」、「どちらかといえばはい」、「どちらかといえばいいえ」、「いいえ」の 4 段階で評価した。得点が高いほど、共感性が高い。

分析方法

児童自立支援施設入所児童と一般生徒の向社会的行動尺度と共感性尺度の比較を行うため、向社会的行動は因子分析を行い、共感性尺度は大山（2004）の論文にて単因子構造を仮定し、信頼性を確認した上で、t 検定をおこなった。また、向社会的行動尺度と共感性のモデルを検証するため、性別と学年差（一般生徒）及び年齢差（入所児童）のモデルを構築し、パス解析を行った。

統計処理には SPSS22.0for Windows、Amos22 を使用し、統計的な有意水準は以下特別に明言しない場合は $p < .05$ とした。

研究 3：非行少年と保護司の向社会的行動への考えとサポート受容意識の比較

対象：研究 2 の児童自立支援施設児童及び関東圏内にある某保護観察所所属の保護司 67 名（有効回答数 65 名、男性 28 名、女性 37 名） 平均年齢平均値 66.6 歳（標準偏差 5.7）、経験年数平均値 14 年（標準偏差 7.6）。担当人数は平均値 14.4 名（標

準偏差 13.3）（表 1 参照）、保護司が担当した少年について、罪種名別に経験ありかを回答してもらい、保護司の有効回答数人数から経験人数をパーセンテージで計算したものを表 2 に示した。

表 1.保護司担当人数（男子・女子）

担当 人数	男子	女子
平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)
14.4 (13.3)	12.1 (11.5)	2.2 (3.4)

表 2.保護司担当少年の罪種

罪種名	担当経験あり（経験数/65名%）
1 殺人	5 名 (7.7)
2 強盗	10 名 (15.4)
3 放火	4 名 (6.2)
4 強姦	6 名 (9.2)
5 凶器準備集合	3 名 (4.6)
6 暴行	31 名 (47.7)
7 傷害	39 名 (60.0)
8 脅迫	12 名 (18.5)
9 恐喝	36 名 (55.4)
10 窃盗	49 名 (75.4)
11 万引き	39 名 (60.0)
12 交通違反	16 名 (24.6)
13 性犯罪	4 名 (6.2)
14 売春	6 名 (9.2)
15 薬物乱用	25 名 (38.5)
16 虞犯	5 名 (7.7)
17 その他	器物破損、公務執行妨害 建造物侵入、児童福祉法違反 売春防止法違反（勧誘） 振り込め詐欺 計6名 (2.0%)

調査項目：保護司には属性として性別、年齢の他、経験年数、非行少年の担当人数（男女）、担当少年の罪種名について伺った。

また、質問紙法にて保護司が感じている非行少年の向社会的行動について聞くため、①「向社会的行動（思いやり行動）を育てると、反社会的行動（問題行動）は減ると思いますか？」を 1.とてもそう思う、2.ややそう思う、3.どちらとも言えない、4. ややそう思わない、5 全くそう思わないの 5 件法で回答してもらい、②回答した理由を自由記述で回答してもらった。

サポートについては、「非行少年はどんなサポー

トを必要としてると思いますか？」の教示に自由記述で回答してもらった。

児童自立支援施設入所児童には研究2同様属性の他、「周りの大人にどんなサポートをして欲しいと思いますか？思いついたことを自由に書いて下さい。」の教示に対し自由記述で回答してもらった。

分析方法：自由記述の回答は、KJ法を参考として分類した。分類・分析は指導教員1名と本研究者の他、研究協力者として、臨床心理士1名、計3名で行った。分類は①自由記述の意味が読み取れる単語及び短文章に分けてから、②意味内容が類似するもので分類した（小カテゴリ）、次に意味内容が同じものにカテゴリ名をつけた。④さらに、小カテゴリの意味内容が類似しているもので分類し、内容を端的にするカテゴリ名を付けた（中カテゴリ）。⑤④と同様の手順で中カテゴリをまとめ、大カテゴリを抽出した。

まず、保護司を分類し、入所児童の分類は保護司と比べられるように保護司の分類を参考とし、できるだけ同じカテゴリ名で分類した。迷った分類は言葉の定義を調べて、研究協力者と話し合い分類した。

倫理的配慮

本研究は、国際医療福祉大学大学院倫理委員会にて承認を得ている。実施にあたっては、小学校の校長及び副校長、中学校教諭の校長及び副校長、施設長及び職員に目的・趣旨・方法を説明し、調査協力の同意を得た。保護司に関しては、首席保護観察官及び統括保護観察官に目的・趣旨・方法を説明し、同様に調査協力の同意を得た。対象者には、回答者の匿名性が保護されること、回答は自由意思によること、研究参加を承諾した後でも途中で中断できること、回答を拒否することで不利益は生じないことを担任教諭または保護観察官を通し

て口頭で説明してもらうことをお願いし、質問用紙の書面にも記載した。回答の提出を持って調査協力の同意とみなした。

3. 結果

研究1 思春期生徒の向社会的行動及びストレス、ソーシャルサポートの学年別比較

1. 各尺度の信頼性の確認

1.1. 向社会的行動尺度の信頼性の確認

向社会的行動尺度は2012年の最新の論文であるため全16項目について、因子を再度確認するため因子分析を行った。向社会的行動尺度の全16項目について、主因子解による因子分析を行った。結果、固有値の変化から、3因子構造が妥当であると考えられた。この結果は村上ら（西村らの2011年論文に先駆けて発表した学会大会論文集）と同じ3因子であった（表3）。

向社会的行動尺度の信頼性を確認するために、cronbachの α 係数を算出した。「家族因子」の項目を算出したところ.87であった。「友達因子」では.84、「地域社会因子」では.78であり、すべての項目で内的整合性の高さが確認された。

1.2. ストレス反応尺度の信頼性の確認

ストレス症状尺度の全16項目について、主因子解によるVarimax回転の因子分析を行ったところ4因子が抽出された。抽出された4因子のうち2因子は岡安ら（1993）と異なる項目の下位因子であり、もう2因子は同じ項目の下位因子であった（表4）。第1因子は、「不機嫌・怒り」因子と同じ4項目であったため、同様の因子名にした。第2因子は、「泣きたい気分だ」や「悲しい」など抑うつ状態を表す3項目であったため「抑うつ気分」と命名した。第3因子は、「体がだるい」や「心が暗い」など身体や心の症状の5項目であったため「心身の症状」と命名した。第4因子は、「無気力」因子と

同じ項目であったため、同様の因子名にした。4 因子での説明可能な分散の割合の総和は、68.05%であった。

信頼性を検討するために、下位因子ごとに cronbach の α 係数を算出したところ、.67~.87 という値が得られ、内的整合性が確認された。

尺度は 20 年近く前に作成された尺度であることを考慮し、今回得られた因子において分析することとした。

1.3. ソーシャルサポートの信頼性の確認

ソーシャルサポート尺度の信頼性を確認するために、cronbach の α 係数を算出した (表 5)。ソーシャルサポートの「保護者」の 5 項目を算出したところ.92 であった。「先生」では.91、「友達」では.93 であり、すべての項目で内的整合性の高さが確認された。

2. 各尺度の学年別比較

2.1. 向社会的行動尺度の性差と学年差

向社会的行動尺度の各因子が性別と学年により異なるかを検討した。分析は性別(男子・女子)×学年 (小学 5 年生、小学 6 年生、中学 1 年生、中学 2 年生、中学 3 年生) の 2 要因分散分析(いずれも被験者間要因)で行った(表 6)。従属変数は、向社会的行動尺度の 3 つの因子得点であった。分散分析の結果、家族因子では、性別と学年別の主効果に有意差がみられたが、交互作用に有意差は見られなかった。性別では、小学 5 年生と中学 1 年生、中学 2 年生、中学 3 年生で女子の方が男子より有意に得点が高かった。学年別では、小学 5 年生と小学 6 年生は中学 1 年生より有意に得点が高かった。

表 3. 向社会的行動尺度の因子分析結果 (主因子・プロマックス回転)

質問項目	因子			
	1	2	3	
(4) 家の人が体調がわるいとき、かんびょうした。	.81	.60	.55	.65
(5) 家ぞくの人を持っている重たい荷物を少し持ってあげた。	.74	.54	.50	.55
(1) 家ぞくの人誕生日やお祝いの日、父の日、母の日にプレゼントをした。	.73	.56	.50	.47
(6) 家ぞくの人、さがし物をしているとき、いっしょにさがした。	.72	.55	.48	.53
(3) 家ぞくの人つかれている時に、家事を手伝ってあげた。	.69	.58	.45	.54
(2) 家ぞくに自分の物をかした。	.69	.48	.45	.49
(7) 登下校中に雨が降ってきたとき、友だちをカサの中に入れてあげた。	.60	.78	.60	.53
(12) 先生に作業をたのまれた友だちを、手伝ってあげた。	.52	.73	.58	.61
(10) 授業中、とくいな教科で友だちがわからないことがあったとき、教えてあげた。	.57	.72	.50	.54
(8) 学校で忘れ物(えんぴつ、消しゴムなど)をした友だちに、自分のものをかした。	.55	.71	.59	.51
(9) ケガや病気の友だちを、ほけん室までつれて行った。	.59	.70	.49	.52
(11) 学校で、友達が荷物をたくさん持っているときに、少し持ってあげた。	.39	.57	.45	.33
(14) 電車やバスで、お年寄りに席をゆずった。	.56	.57	.75	.57
(16) 地域の人、道で具合がわるそうにしているとき、声をかけてあげた。	.55	.62	.73	.43
(13) 赤いはねや緑の羽などに、ぼ金をした。	.42	.49	.66	.39
(15) 知らない人が落し物をしたとき、ひろってあげた。	.39	.44	.62	.55
項目の α 係数	.87	.84	.78	
因子間相関 (右上)・得点間相関 (左下)				
1. 「家族因子」	-	.73	.65	
2. 「友達因子」	.67	**	.73	
3. 「地域社会因子」	.59	**	.66	**

**p<.01

表 4. ストレス反応尺度の因子分析結果（主因子・varimax 回転）

質問項目	因子				共通性
	1	2	3	4	
第1因子「不機嫌・怒り」					
(7)いかりを感じる	.82	.22	.24	.22	.82
(15)いらいらする	.76	.24	.30	.18	.76
(11)腹立たしい気分だ	.71	.33	.26	.16	.71
(3)だれかに、いかりをぶつけない	.67	.22	.16	.13	.54
第2因子「抑うつ気分」					
(10)悲しい	.27	.87	.22	.15	.90
(6)泣きたい気分だ	.31	.72	.15	.13	.65
(2)さみしい気持ちだ	.23	.70	.23	.16	.63
第3因子「心身的症状」					
(13)つかれやすい	.21	.13	.65	.26	.56
(9)体がだるい	.26	.12	.65	.21	.54
(5)頭が痛い	.29	.17	.50	.10	.37
(14)心が暗い	.29	.41	.46	.19	.50
(1)よく眠れない	.06	.23	.42	.24	.29
第4因子「無気力」					
(8)むずかしいことを考えることができない	.17	.12	.10	.70	.55
(4)ひとつのことに集中することができない	.09	.16	.20	.70	.56
(16)勉強が手につかない	.16	.05	.24	.63	.48
(12)根気がない	.19	.24	.38	.46	.45
項目の α 係数					
	.90	.88	.78	.78	
因子寄与率					
	2.79	2.41	2.10	2.00	9.30
寄与率					
	17.41	15.08	13.14	12.48	58.11

表 5. 保護者・先生・友達ソーシャルサポート尺度における質問項目間の相関係数

保護者のソーシャルサポート($\alpha=.92$)						
(1)あなたに元気がないと、すぐ気づいて、はげましてくれる。	-	.74 **	.64 **	.70 **	.62 **	
(2)あなたが何か失敗をしても、そっと助けてくれる。	-		.69 **	.71 **	.68 **	
(3)ふだんからあなたの気持ちをよくわかってくれる。	-			.70 **	.68 **	
(4)あなたが何かなやんでいると知ったら、どうしたらよいか教えてくれる。	-				.66 **	
(5)あなたが、なやみやふまんを言っても、いやな顔をしないで聞いてくれる。	-					
先生のソーシャルサポート($\alpha=.91$)						
(1)あなたに元気がないと、すぐ気づいて、はげましてくれる。	-	.77 **	.73 **	.70 **	.63 **	
(2)あなたが何か失敗をしても、そっと助けてくれる。	-		.75 **	.72 **	.68 **	
(3)ふだんからあなたの気持ちをよくわかってくれる。	-			.71 **	.68 **	
(4)あなたが何かなやんでいると知ったら、どうしたらよいか教えてくれる。	-				.70 **	
(5)あなたが、なやみやふまんを言っても、いやな顔をしないで聞いてくれる。	-					
友達のソーシャルサポート($\alpha=.93$)						
(1)あなたに元気がないと、すぐ気づいて、はげましてくれる。	-	.73 **	.69 **	.64 **	.65 **	
(2)あなたが何か失敗をしても、そっと助けてくれる。	-		.71 **	.63 **	.66 **	
(3)ふだんからあなたの気持ちをよくわかってくれる。	-			.68 **	.63 **	
(4)あなたが何かなやんでいると知ったら、どうしたらよいか教えてくれる。	-				.68 **	
(5)あなたが、なやみやふまんを言っても、いやな顔をしないで聞いてくれる。	-					

**p<.01

友達因子では、性別と学年別の主効果に有意差がみられたが、交互作用に有意差は見られなかった。性別では、全学年で女子の方が男子より有意に得点が高かった。学年別では、小学5年生が中学1年生より有意に得点が高かった。

地域社会因子では、学年別の主効果に有意差がみられたが、性別の主効果と交互作用に有意差は見られなかった。学年別では、小学5年生は他の学年より有意に得点が高く、中学1年生は他の学年より有意に得点が低かった。

中学1年生が全体的に向社会的行動尺度の得点が低いことが示された。

2.2. ストレス反応尺度の性差と学年差

ストレス反応尺度の各因子が性別と学年により異なるかを検討した。分析は性別(男子・女子)×学年(小学5年生, 小学6年生, 中学1年生, 中学2年生, 中学3年生)の2要因分散分析(いずれも被験者間要因)で行った(表7)。従属変数は、ストレス反応尺度の3つの因子得点であった。

分散分析の結果、心身的症状、抑うつ気分、不機嫌・怒りにおいても性別と学年別の主効果及び交互作用に有意差は見られなかった。

無気力では、性別の主効果に有意差は見られなかったが、学年別の主効果と交互作用に有意差が見られた。交互作用において、中学1年生の男子

が他の4つの学年の男子より有意に無気力ストレスが高いのに対し、女子では、1学年上の中学2年生の女子が小学5年生と小学6年生の女子より有意に無気力ストレスが高かった。

2.3. ソーシャルサポート尺度の性差と学年差

ソーシャルサポート尺度の各因子が性別と学年により異なるかを検討した。分析は性別(男子・女子)×学年(小学5年生, 小学6年生, 中学1年生, 中学2年生, 中学3年生)の2要因分散分析(いずれも被験者間要因)で行った(表8)。従属変数は、ソーシャルサポート尺度の3つの因子得点であった。分散分析の結果、保護者のソーシャルサポートと先生のソーシャルサポートでは、両者共に同じ結果が得られた。学年別の主効果に有意差が見られたが、性別の主効果と交互作用に有意差は見られなかった。学年別では、小学5年生が中学2年生より得点が有意に高く、さらに小学6年生は、中学1年生、2年生、3年生の中学生すべての学年より得点が有意に高かった。

友達のソーシャルサポートにおいては性別の主効果に有意差が見られたが、学年別の主効果と交互作用に有意差は見られなかった。性別では、小学5年生、中学2年生、中学3年生で、男子より女子のほうが得点が有意に高かった。

表6. 向社会的行動尺度の下位因子別の合計得点の平均値(標準偏差)と分散分析結果

因子名	性別	小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生	F値			Bonferroniの 多重比較結果
		平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	平均値 (SD)	性別	学年別	交互作用	
家族因子	男子	18.80 (0.59)	18.82 (0.52)	15.24 (0.64)	17.14 (0.42)	16.54 (0.66)	23.86 ***	9.43 ***	1.22	男<女(小5,中1,中2,中3) 小5,小6>中1 小5>中2
	女子	20.93 (0.54)	19.27 (0.55)	17.41 (0.72)	18.69 (0.45)	19.58 (0.84)				
友達因子	男子	16.04 (0.64)	15.61 (0.57)	14.15 (0.70)	15.34 (0.47)	15.31 (0.72)	43.36 ***	2.90 *	0.25	男<女(全学年) 小5>中1
	女子	18.91 (0.59)	18.04 (0.61)	16.28 (0.79)	18.13 (0.49)	18.88 (0.92)				
地域社会因子	男子	10.59 (0.45)	9.55 (0.40)	7.80 (0.49)	9.63 (0.32)	8.51 (0.50)	2.69	10.68 ***	1.39	小5>小6,中2,中3>中1
	女子	11.21 (0.41)	9.98 (0.42)	7.84 (0.55)	9.24 (0.34)	10.21 (0.64)				
小5: 小学5年生, 小6: 小学6年生, 中1: 中学1年生, 中2: 中学2年生, 中3: 中学3年生										
合計	男子	45.53 (10.46)	43.98 (10.47)	37.38 (9.08)	42.22 (11.49)	40.36 (10.66)	29.24 ***	8.49 ***	0.63	男<女(小5,小6,中2,中3) 小5,小6,中2,中3>中1 小5>中2
	女子	51.04 (8.22)	47.98 (9.81)	41.53 (12.19)	46.06 (9.30)	48.67 (8.56)				

*p<.05, ***p<.001

小5: 小学5年生, 小6: 小学6年生, 中1: 中学1年生, 中2: 中学2年生, 中3: 中学3年生

表 7. ストレス反応尺度の下位因子別の合計得点の平均値(標準偏差)と分散分析結果

因子名	性別	小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生	F値			Bonferroniの 多重比較結果
		平均 値 (SD)	平均 値 (SD)	平均 値 (SD)	平均 値 (SD)	平均 値 (SD)	性別	学年別	交互作用	
心身的症状	男子	8.19 (0.46)	7.56 (0.40)	8.24 (0.49)	8.28 (0.33)	8.18 (0.50)	0.01	1.53	1.11	
	女子	7.37 (0.41)	8.11 (0.42)	7.84 (0.56)	8.89 (0.34)	8.38 (0.65)				
抑うつ気分	男子	4.15 (0.25)	3.63 (0.22)	3.44 (0.27)	3.73 (0.18)	3.68 (0.27)	1.16	0.90	1.01	
	女子	3.81 (0.22)	3.59 (0.23)	3.94 (0.30)	4.06 (0.19)	4.08 (0.35)				
不機嫌・怒り	男子	5.94 (0.43)	5.85 (0.37)	5.73 (0.46)	6.12 (0.30)	5.73 (0.46)	0.06	0.83	0.25	
	女子	5.63 (0.38)	5.61 (0.39)	6.03 (0.52)	6.32 (0.32)	5.46 (0.60)				
無気力	男子	6.19 (0.39)	6.42 (0.34)	8.44 (0.41)	6.81 (0.27)	6.50 (0.42)	2.18	6.38 ***	3.03 *	小5,小6<中1 小5<中2 男子小5,小6,中2,中3<中1 女子小5,小6<中2
	女子	5.51 (0.35)	6.14 (0.35)	6.66 (0.47)	7.44 (0.29)	6.79 (0.54)				
合計	男子	24.47 (9.99)	23.47 (6.57)	25.97 (8.43)	24.75 (8.79)	24.28 (8.30)	0.11	1.96	1.13	
	女子	22.42 (7.37)	23.30 (8.69)	24.47 (9.17)	26.75 (9.44)	24.71 (6.04)				

*p<.05, ***p<.001

小5：小学5年生，小6：小学6年生，中1：中学1年生，中2：中学2年生，中3：中学3年生

表 8. ソーシャルサポート尺度の下位因子別の平均値(標準偏差)と分散分析結果

因子名	性別	小学5年生	小学6年生	中学1年生	中学2年生	中学3年生	F値			Bonferroniの 多重比較結果
		平均 値 (SD)	平均 値 (SD)	平均 値 (SD)	平均 値 (SD)	平均 値 (SD)	性別	学年別	交互作用	
保護者	男子	16.90 (0.56)	17.27 (0.49)	15.18 (0.62)	14.49 (0.40)	14.88 (0.61)	2.33	8.41 ***	0.48	小5>中2 小6>中1,中2,中3
	女子	17.19 (0.51)	17.25 (0.52)	15.66 (0.69)	15.65 (0.42)	15.75 (0.79)				
先生	男子	14.78 (0.58)	16.65 (0.52)	13.82 (0.65)	13.10 (0.42)	13.45 (0.65)	0.11	13.53 ***	0.74	小5>中2 小6>中1,中2,中3
	女子	15.81 (0.54)	15.93 (0.55)	13.75 (0.72)	12.92 (0.44)	14.00 (0.83)				
友達	男子	14.73 (0.52)	15.42 (0.47)	15.03 (0.59)	13.82 (0.38)	14.43 (0.58)	37.14 ***	1.41	0.83	男<女 (小5,中2,中3)
	女子	16.84 (0.48)	16.63 (0.49)	16.72 (0.65)	16.40 (0.40)	17.25 (0.75)				
合計	男子	46.04 (9.59)	49.34 (9.10)	44.03 (9.14)	41.57 (10.85)	43.46 (10.29)	8.87 **	9.25 ***	0.55	男<女(小5,中2) 小5>中2 小6>中1,中2,中3
	女子	49.79 (7.86)	49.87 (9.32)	46.13 (8.28)	44.88 (9.47)	47.00 (8.36)				

p<.01, *p<.001

小5：小学5年生，小6：小学6年生，中1：中学1年生，中2：中学2年生，中3：中学3年生

3. 向社会的行動とストレス及びソーシャルサポートの関連性

向社会的行動尺度の合計得点に影響する要因を調べるため、学年別にステップワイズ法による重回帰分析を行った。目的変数は向社会的行動尺度の下位因子「家族」「友達」「地域社会」と尺度の全体合計得点とし、説明変数はストレス反応尺度の下位因子「心身的症状」「抑うつ気分」「不機嫌・怒り」「無気力」とソーシャルサポート尺度「保護者」「友達」「先生」と性別とした。その結果を表9、表10、表11に示す。

分析の結果、家族因子では、保護者のソーシャルサポートの他、友達のソーシャルサポートが小学5年生から中学2年生まで関連していた。ストレス反応尺度では、小学5年生と中学1年生で心身的症状が正の関連を示しており、小学6年生と中学1年生で無気力が負の関連を示していた。友達因子では、小学5年生から中学2年生まで、友達のソーシャルサポートが有意に関連していた。ストレス反応尺度では、中学1年生で無気力が負の関連を示していた。地域社会因子では、小学5年生から中学1年生まで友達のソーシャルサポー

トが有意に関係しており、中学2年生から先生のソーシャルサポートが有意に関係している。ストレス反応尺度では、小学5年生で心身的症状が正の関連を示していた。回帰式の説明率は、重決定係数が0.10程度もあるが、モデルの有効性を示すF値はすべての分析において0.01%水準で有意であった。

表 9. 家族への向社会的行動を目的変数とした学年別の重回帰分析結果

		β	R^2
小学5年生	心身的症状	0.26 **	0.32 ***
	保護者のソーシャルサポート	0.27 **	
	友達のソーシャルサポート	0.27 **	
	性別	0.25 **	
小学6年生	無気力	-0.20 *	0.41 ***
	保護者のソーシャルサポート	0.30 ***	
	友達のソーシャルサポート	0.34 ***	
中学1年生	心身的症状	0.35 **	0.53 ***
	無気力	-0.33 **	
	保護者のソーシャルサポート	0.47 ***	
	友達のソーシャルサポート	0.27 **	
中学2年生	保護者のソーシャルサポート	0.37 ***	0.32 ***
	友達のソーシャルサポート	0.27 **	
中学3年生	保護者のソーシャルサポート	0.43 **	0.30 ***
	性別	0.31 ***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

β :標準編回帰係数 R^2 :重決定係数

表 10. 友達への向社会的行動を目的変数とした学年別の重回帰分析結果

		β	R^2
小学5年生	友達のソーシャルサポート	0.32 **	0.19 ***
	性別	0.21 *	
小学6年生	保護者のソーシャルサポート	0.25 **	0.39 ***
	友達のソーシャルサポート	0.40 ***	
	性別	0.21 **	
中学1年生	無気力	-0.29 **	0.34 ***
	友達のソーシャルサポート	0.48 ***	
中学2年生	友達のソーシャルサポート	0.48 ***	0.30 ***
	性別	0.15 *	
中学3年生	性別	0.34 **	0.12 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

β :標準編回帰係数 R^2 :重決定係数

表 11. 地域社会への向社会的行動を目的変数とした学年別の重回帰分析結果

		β	R^2
小学5年生	心身的症状	0.29 ***	0.18 ***
	友達のソーシャルサポート	0.41 **	
小学6年生	保護者のソーシャルサポート	0.29 **	0.25 ***
	友達のソーシャルサポート	0.30 **	
中学1年生	友達のソーシャルサポート	0.31 **	0.10 **
中学2年生	保護者のソーシャルサポート	0.48 **	0.17 ***
	先生のソーシャルサポート	0.15 **	
中学3年生	先生のソーシャルサポート	0.43 ***	0.26 ***
	性別	0.26 **	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

β :標準編回帰係数 R^2 :重決定係数

研究2 思春期生徒と非行少年の比較

1. 児童自立支援施設入所児童と向社会的行動

1.1. 向社会的行動尺度と共感性の信頼性の確認

一般生徒小学5年生から高校2年生と入所児童のデータを基に、研究1同様の主因子解によるPromax回転の因子分析を行った。その結果、研究1同様「家族因子」「学校因子」「地位社会因子」の同じ因子に分かれた。信頼性を確認するため、cronbachの α 係数を算出した。その結果、.86~.75の値が産出され内的整合性の高さが確認された。

次に、共感性尺度は信頼性確認のため、cronbachの α 係数を算出した。その結果、.81が算出され、内的整合性の高さが確認された。

1.2. 向社会的行動尺度の平均値の比較

一般生徒と入所児童の向社会的行動の平均値の差を確認するため、t検定を行った(表12)。

その結果、向社会的行動の「家族因子」のみ有意差があった。また、共感性には有意差は見られなかった。

表 12. 向社会的行動下位因子一般生徒及び入所児童の各合計得点の平均値とt検定結果

		平均			t値	p値
		N	値	SD		
家族因子	一般生徒	1027	17.57	4.29	3.40	**
	入所児童	87	15.91	4.77		
学校因子	一般生徒	1027	16.26	4.56	1.81	n.s.
	入所児童	87	15.21	5.22		
地域因子	一般生徒	1027	9.38	3.08	0.70	n.s.
	入所児童	87	9.14	3.25		

9 ** $p < .01$

2. 思春期である入所児童と一般生徒の向社会的行動に及ぼす影響

思春期時期の入所児童と一般生徒の「向社会的行動」と「共感性」「性別」「学年差」(入所児童では、「年齢差」)に因果関係がみられるかモデルを構築し、その確認を行うため、パス解析を行った。

ここでは、先に相関係数及び、重回帰分析を行いその関係に基づきモデルを構築した。その上で Amos22 を使用し、モデルの適合度を確認しながらパスの設定を変更して、最適なモデルであるか確認していった。その結果を図3、図4に示す。

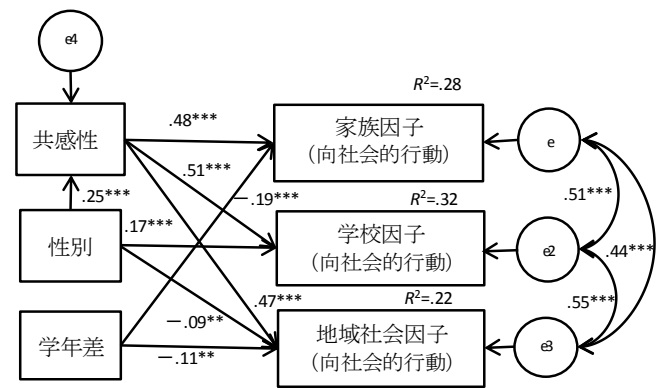
その結果、入所児童も一般生徒も「向社会的行動」と「共感性」及び「性別」には同じ影響を表していた。しかし、「学年差」及び「年齢差」と「向社会的行動」では、一般生徒では向社会的行動の「家族因子」と「地域社会因子」に影響がみられることが分かったが、入所児童では、その構図がみられなかった。また、「共感性」と「性別」も入所児童ではその関連が見られなかった。

研究3 非行少年と保護司の比較

1. 保護司が感じる非行少年の向社会的行動と反社会的行動の関連

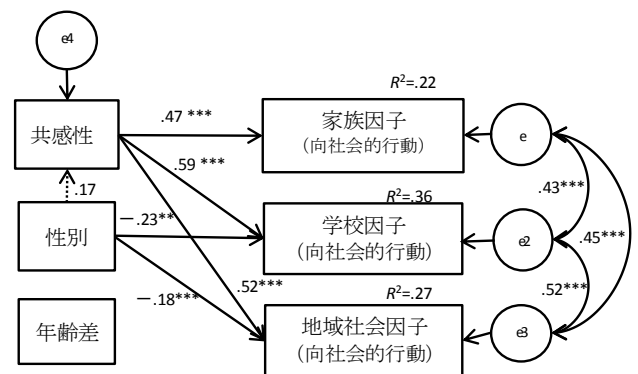
保護司を対象に、非行少年と関わって「向社会的行動(思いやり行動)を育てると、反社会的行動(問題行動)は減ると思いますか?」の問いに4件法で回答を求めた。その結果、とてもそう思う18名(27.7%)、ややそう思う31名(47.7%)、どちらとも言えない13名(27.7%)、ややそう思わない1名(1.5%)、全くそう思わない2名(3.1%)であった。さらに、回答した理由について尋ねた結果、回答を得られたのは55名(とてもそう思う18名、ややそう思う27名、どちらとも言えない9名、ややそう思わない1名、全くそう思わない0名)であり、向社会的行動を育てることで問題行動が減るということに【肯定的意見】(回答数59)【中立的意見】(回答数4)【否定的意見】(回答数14)の3つの意見が得られた(表12参照)。「とてもそう思う」と回答した保護司は100%が【肯定的意見】を述べ、「ややそう思う」では【肯定的意見】が70%以上あったが【否定的意見】も14%述べられた。「どちらとも言えない」に関しては、【肯定的意見】は11%程度に留まり、代わりに【否定的意見】が70%以上となった。ややそう思わないは1名しか回答が得られず【否定的意見】が100%となった。

見】(回答数4)【否定的意見】(回答数14)の3つの意見が得られた(表12参照)。「とてもそう思う」と回答した保護司は100%が【肯定的意見】を述べ、「ややそう思う」では【肯定的意見】が70%以上あったが【否定的意見】も14%述べられた。「どちらとも言えない」に関しては、【肯定的意見】は11%程度に留まり、代わりに【否定的意見】が70%以上となった。ややそう思わないは1名しか回答が得られず【否定的意見】が100%となった。



矢印：標準化パス係数 (** $p < .01$, *** $p < .001$)
e~e4 は誤差変数、誤差変数間の数値は相関係数 (*** $p < .001$)
モデルの適合度： $\chi^2 = 4.38$ $p = .22$ $GFI = .998$ $AGFI = .989$ $RMR = .02$

図3. 思春期における一般生徒の向社会的行動に及ぼす要因



矢印：標準化パス係数 (** $p < .01$, *** $p < .001$)
e~e4 は誤差変数、誤差変数間の数値は相関係数 (*** $p < .001$)
モデルの適合度： $\chi^2 = 1.14$ $p = .28$ $GFI = .995$ $AGFI = .922$ $RMR = .04$

図4. 思春期における児童自立支援施設入所児童の向社会的行動に及ぼす影響

表 13.保護司による向社会的行動と反社会的行動に関する意見

	とても そう思う n (%)	やや そう思う n (%)	どちらとも 言えない n (%)	ややそう 思わない n (%)	合計
合計回答数	28	39	9	1	77
肯定的意見					
(思いやりが強いと)相手の気持ちを理解し、相手を傷つけたりしなくなる	7 (25.0)	7 (17.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	14
(人助けの行動の中で)感謝されることで思いやり行動が育ち、自らもするようになる	3 (10.7)	4 (10.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	7
環境から思いやり行動とは無縁の生活をしてきた少年が多く、優しく思いやりのある愛情を体験すると育つから	4 (14.3)	3 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	7
社会常識やマナー、日常生活の改善が向社会的行動に繋がるから	4 (14.3)	2 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	6
自己中心的で周りのことを考えない少年が多いから	3 (10.7)	2 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	5
自尊心や自己有能感が低いので育てれば良い	1 (3.6)	3 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	4
保護司の活動や努力次第	1 (3.6)	2 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	3
仲間関係だけでは、同情や手助けも良い方向に繋がらない	2 (7.1)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	3
社会貢献活動(ボランティア活動)などで育つことがある	0 (0.0)	1 (2.6)	1 (11.1)	0 (0.0)	2
自分の存在を知ってもらうことで意識が変わる	1 (3.6)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	2
素直で正直やさしさの気持ちが大事だから	1 (3.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1
思いやり行動が育てば、家族や周囲の人に迷惑や心配を掛けたくないと思うから	1 (3.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1
少年の心を開かせる	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1
単独犯の場合は思いやり行動を育てると更生できると思う	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1
思いやり行動を育てると問題行為のうち弱者に対するものは確実に減ると思う	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1
少年が好意的であれば良い結果が出る	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1
肯定的意見合計回答数	28 (100.0)	30 (76.9)	1 (11.1)	0 (0.0)	59
中立的意見					
強制的に思いやり行動をさせることができないから	0 (0.0)	1 (2.6)	1 (11.1)	0 (0.0)	2
家庭環境に踏み込めるかが大切	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1
様々な人間関係において自分を必要としている事を感じれば優しくなっていく	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	1
中立的意見合計回答数	0 (0.0)	3 (7.7)	1 (11.1)	0 (0.0)	4
否定的意見					
本人の自覚がないと、周囲が育てようとしても解決しない	0 (0.0)	3 (7.7)	1 (11.1)	0 (0.0)	4
家庭環境(劣悪な家庭環境が多い)ので、育てることが難しく簡単に答えは出せない	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (33.3)	1 (100.0)	4
自発的に手助けしてても、表面上だったり相手の気持ちを受け止められない子がいる	0 (0.0)	2 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	2
相手が抱える根本的な悩みを解決しないと向社会的行動は育たない	0 (0.0)	1 (2.6)	1 (11.1)	0 (0.0)	2
少年は自分のことで精いっぱい自発的に手助けをするまでにはなりにくい	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (11.1)	0 (0.0)	1
非行年齢によって、大人の意見を聞き入れられない少年がいる	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (11.1)	0 (0.0)	1
否定的意見合計回答数	0 (0.0)	6 (15.4)	7 (77.8)	1 (100.0)	14

2. 児童自立支援施設児童と保護司のサポート感の比較

児童自立支援施設児童は「周りの大人にどんなサポートをして欲しいと思いますか?」、保護司には

「非行少年はどんなサポートを必要としていると思いますか?」について、それぞれ自由記述で回答を得た(表 13、表 14 参照)。

児童自立支援施設入所児童は【心のケア】【サポ

一トの否定的意見】【環境充足の要求】【教育・進路支援】【現状維持】【その他】の6つのカテゴリが得られた。

保護司は【心のケア】【環境充実の整備】【社会的支援の利用】【その他】の4つのカテゴリが得られた。

表 14.児童自立支援施設児童が欲するサポート

大カテゴリ	合計人数	中カテゴリ	合計人数	小カテゴリ	人数	
心のケア	29 25 %	心理的援助の希求	20 17 %	相談(話)を聞いて欲しい(心理の先生、保護司など)	3	
				褒めてほしい	2	
				自分のことを見てほしい(頑張るとこなど)	2	
				サポートは必要、助けて欲しい	2	
				(自分にとって)嬉しいサポート	2	
				優しくしてほしい	2	
もっと面白いことを言って笑わせてほしい	1					
話をして欲しい	1					
たまに優しく、たまに厳しく	1					
心の悩みの解決	1					
信じてもらいたい	1					
人として生きていくためのサポート	1					
心理的教育の希求	5 4 %		4 %	やってはいけない事を教えてくれた	2	
				困っていたら人を助けてあげること	1	
				寮の先生にいろいろ教えてもらいたい	1	
わかりやすく説明して欲しい	1					
子どもの理解	2 2 %		2 %	子どもの気持ちを理解して欲しい	2	
コミュニケーションスキルの向上	4 3 %		3 %	人付き合いを上手にしてほしい	1	
				友達ができるようにしてほしい	1	
				明るくなるようにしてほしい	1	
サポートの否定的意見	13 11 %	サポートの否定	12 10 %	サポートしないで欲しい(一度見捨てた人)	2	
				意見を押し付けしないで欲しい	2	
				強く言わないで欲しい、怒りすぎ	2	
				傷を掘り返してほしくない	1	
				干渉しないで欲しい	1	
				子どもに謝らせなくて欲しい	1	
大人は絶対と思わないで欲しい	1					
出来ないくせにやろうとしないで欲しい	1					
思い違いほしないで欲しい	1					
(以前)しゃべりかけるとスルーするのをやめてほしい	1					
将来の決断	1 1 %		1 %	将来は自分で決めたい	1	
環境充足の要求	43 37 %	家族関係の充実	15 13 %	親と暮らしたい、離れたくない	7	
				家に帰りたい	3	
				親(家族)と話したい、親と繋いで欲しい	3	
				面会を増やしてほしい	2	
				楽しく家族で旅に出たい	1	
				家族に朝、挨拶して欲しい	1	
		手紙が欲しい	1			
		学校活動の充実	10 9 %	9 %	(学校の)クラブを増やしてほしい	4
					ブールの時間を延ばしてほしい	1
					体育館に行く時間を増やしてほしい	1
					お小遣いもって学校に行きたい	1
					お楽しみ会みたいなことをしたい	1
一緒にスポーツしたい	1					
いじめをなくしてほしい	1					
生活の充実	9 8 %	8 %	周りの大人と関わりたい、遊びたい	3		
			お金が欲しい(おこづかいを上げて欲しい)	2		
			他の寮の見学	1		
			寮の部屋を変えて欲しい	1		
			寮のルールを統一して欲しい	1		
			自分のしたい事を手伝ってほしい	1		
自由時間の充実	9 8 %	8 %	オシャレがしたい	2		
			一人になれることを増やしてほしい(自由時間)	2		
			帰りの電車を乗り降りしたい	1		
			携帯を持ちたい	1		
			自由に本が読みたい	1		
			プライバシーを守って欲しい	1		
何でも買えるようになればいい	1					
学業・進路	6 5 %	学業支援	4 3 %	勉強を教えてください(分かりやすく)	4	
				進路の事を一緒に考えてほしい	2	
現状維持	21 18 %	特になし	19 16 %	特になし	19	
				今のままでいい	2 2 %	
その他	3 3 %	その他	3 3 %	無駄に税金を使わないで欲しい	1	
				選挙に行ってください	1	
				地域の見回りパトロールをして欲しい	1	
					1	
	116 100 %		116 100 %		113	

表 15.保護司が行う非行少年のサポート

大カテゴリ	合計人数	中カテゴリ	合計人数	小カテゴリ	人数					
心のケア	94	68 %	心理的援助の態度	53	38 %	傾聴(話を聞くこと)	18			
						存在を認めること	10			
						信頼関係の形成	6			
						共感	5			
						愛情を注ぐこと、慈愛	6			
						褒める(良い行動など)	5			
						必要とされている人だという自覚を持たせる	3			
			心理的教育	10	7 %	善悪を諭す、(迷惑な事など)注意する	3			
						時には厳しくすること(親心で)	2			
						自立できるサポート(非行仲間と離れても)	2			
						社会への帰属意識を高める	1			
						社会ルールの理解	1			
少年理解	7	5 %	生きる目標を示す具体的なアドバイス	1						
			少年の立場に立つ	2						
			(少年を)信用する	1						
			非行に捕らわれない柔軟な発想を持つこと	1						
			少年の可能性を引き出すこと	1						
援助者とのコミュニケーション	15	11 %	少年の気持ちの理解	1						
			少年の特質を踏まえること	1						
			気長に待つこと	1						
			相談相手になる	5						
			(暖かく)見守ること	4						
内省	3	2 %	支えてくれる人、寄り添ってくれる人の存在	2						
			家族のように暖かく接する	1						
			ファミレスでの食事	1						
保護司(大人)側の理解	2	1 %	事件以外の話をする	1						
			ささいなことでも見落とさないように優しくする	1						
環境充実の整備	25	18 %	将来への希望を持たす	4	3 %	今の自分を知る事	1			
						心の豊かさの大切さを考えさせる	1			
			家族関係	7	5 %	出来ることを見つけ進める	1			
						保護司(大人)側の理解	2	1 %	保護司の話も聞いてもらう	1
			生活の充実	13	9 %	大人を信用してもらう	1			
						将来への希望を持たす	4	3 %	将来の目標(やりがいや夢)を持たせる	4
						仲間関係の見直し	2	1 %	家族の協力	5
家族(親など)への支援	2									
施設の充実	3	2 %				居場所づくり	7			
			暖かい人間関係(周囲との)	2						
			人と触れ合うこと	1						
			貧困連鎖を解消する支援	1						
			周りの連携	1						
社会的支援の利用	19	14 %	生活を築く体験	1						
			就労支援	10	7 %	(反社会的な)人間関係、友人関係について	2			
			教育支援	6	4 %	気軽に行ける、相談施設の必要性	1			
その他	1	1 %	少年の相談窓口を作る	1						
			地域社会参加活動	3	2 %	社会システムの充実をさせるべき	1			
			就労支援	10	7 %	就労支援	10			
教育支援	6	4 %	教育などのサポート	2						
			進学支援	2						
			学校での集団生活	1						
			学校との関係	1						
その他	1	1 %	BBS活動(地域社会に参加)	2						
			経験を積み重ねる活動をさせる	1						
	139	100 %		139	100 %		140			

5. 考察

5.1. 思春期生徒の向社会的行動及びストレス、ソーシャルサポートの学年別比較

本研究では、思春期の向社会的行動とメンタルヘルスの発達の関連を明らかにし、各学年について比較検討を行うことを目的とした。

各尺度について、性差及び学年差を検討した。向社会的行動尺度の学年別では、全体的に小学5年生が有意に高く、中学1年生が他の学年よりも有意に低い傾向にあった。二宮(2009)の縦断的研究では、中学生の向社会的行動が学年進行と共に得点が減少するという結果であったが、本調査では、中学1年生から3年生では有意差が出るほど低下はしなかった。これは縦断的研究と横断的研究の違いによるかもしれない。本研究では、中学1年生で最も得点が低く中学2年生以降上昇した。これは、畠山ら(1998)が指摘している青年期は自我が芽生えいったんそれまでの価値や規範を崩し再構築するという心理過程と関連しているのかもしれない。

ストレス反応尺度については、「無気力」のみ学年差と交互作用が見られた。さらに、男子は中学1年生で最も無気力が高く、女子では学年が上がるごとに無気力ストレスも上がり、中学2年生で最も高くなるという交互作用も明らかとなった。小学生と中学生を対象とした無気力感の研究(笠井ら 1995)において、小学生は「学習不適應感」が高く「身体的不全感」と「消極的友人関係」が低いこと、中学生になると「意欲減退・身体的不全感」より強く感じるようになることが明らかになっている。小学生から中学生になる成長期は第二次性徴と重なるため、身体の急激な発達により、不全感を感じることもあるのかもしれない。それが、意欲減退など無気力状態に体調を変化させることが考えられる。

ソーシャルサポートについて、「保護者」と「先生」では、学年差があり両者同じように小学生より中学生の方がソーシャルサポートを低く感じていた。学年が上がるにつれて両親のサポートが低くなるという結果は(Buhrmester, D. & Furman, W. 1987) など多くの研究がされており、今回の「保護者」に対しても同じ結果を示したと言える。また、「友達」では学年差はなくほぼ横ばいで、男子より女子の方が高く感じているという性差があった。細田(2009)など、これも先行研究と同様の結果であった。中学入学前後でサポート提供者の中心が、両親から親しい友達へ移行するという指摘もあり(細田 2009、尾見 1999)、保護者や先生など大人からのサポートの認知が中学生で低下し、友達は小学生と中学生で同程度というも、発達の段階として友人関係の重要性からこのような結果になったことが考えられる。

次に向社会的行動に影響する要因を調べるためステップワイズ法による重回帰分析をおこなった。その結果、向社会的行動の対象者によって関連する要因が違ふこと、学年によって関連要因に変化があることが分かった。

ストレス反応尺度では、家族への向社会的行動と地域社会への向社会的行動について小学5年生と中学1年生で心身的症状、小学6年生と中学1年生で無気力が関連していた。無気力感については、負の関連を示しており、「根気がない」など無気力を感じている生徒は、向社会的行動のような自発的な行動を行いにくいということである。無気力を感じることで、行動を起こさない結果は納得できよう。しかし、心身的症状については正の関連であった。「つかれやす」「心が暗い」「体がだるい」などの項目で、ストレスを身体症状で感じる場合を想定している。例えば、身体の病気だがその発症や経過に心理・社会的因子が大きく影響しているものに心身症という病があり(富田 2008)、

心身症の病因を考えるには、「過剰適応」と「失感情症」という2つの概念を理解すると役に立つと言われている(中尾 2010)。過剰適応は環境に過剰に適応しようとし、失感情症は自らの感情に気づかない、つまりストレスを感じる事が難しいということであるから、過剰に環境に適応しようとして向社会的行動を行い、ストレスがあるのにそれに気づかず心身的症状を訴える生徒がいるのかもしれない。このことは、新しい見解であり失感情症のような、自分の感情を理解できない、言葉で表すことができないという生徒たちが増えつつある可能性も考えられる。

地域社会への向社会的行動においては、小学5年生から中学1年生まで友達のソーシャルサポートが関連し、中学2年生から中学3年生はそれに代わり先生のソーシャルサポートが関連している。地域社会因子の項目は、「電車やバスで、お年寄りに席をゆずった」「赤いはねや緑の羽などに、ぼ金をした」などであるが、教員が社会的なモラルについて指導していることがこの関連につながったのだろうか。先行研究では、教師からのソーシャルサポートが高いと中学生の問題行動が低いことが明らかにされており(鈴木ら 2001, 2008)、生徒との関わり方によっては先生のソーシャルサポートは上昇し、向社会的行動に影響を与えたことが考えられる。また、対象とした小学校及び中学校の教師の関わり方が影響しているのかもしれない。

5.2. 一般生徒と児童自立支援施設入所児童との比較

向社会的行動及び共感性について、一般生徒と入所児童を比較した結果、「家族因子」は一般生徒の方が向社会的行動を行うことが分かったが、その他の因子及び共感性は、両者に有意差は見られなかった。

次に、向社会的行動と共感性及び性別、学年差

や年齢差の影響についてモデルを仮設しパス解析にて適合度を検証した。その結果、共感性と向社会的行動は両者とも正の関連を示し、共感性の高い者は、向社会的行動を行うという先行研究と一致していた(桜井 1986)。しかし、入所児童では共感性に性差がなかったこと、年齢差の影響が見られなかったことが明らかとなった。一般生徒の結果を異なる理由として、施設入所児童は劣悪な環境で育った者もおり(東京都福祉保健局 2005)、発達の視点や一般的に思春期では女子が男子より共感性が高いといった結果に(登張 2003)当てはまりにくいことが考えられる。

5.3. 児童自立支援施設入所児童と保護司の比較

保護司が非行少年と関わるうえで、向社会的行動の育成が、反社会的行動の低減に役立つか自由記述で調査した。「とてもそう思う」及び「ややそう思う」と回答したものを合計すると約75.4%以上であった。その理由として「相手の気持ちを理解し、相手を傷つけたりしなくなる」や「環境から思いやり行動とは無縁の生活をしていた少年が多く、優しく思いやりのある愛情を体験すると育つから」など、保護司活動の実体験から非行少年の行動について、向社会的行動の育成の重要さが読み取れた。

次に入所児童が求めるサポートと、保護司が必要と感じているサポートは、一致している部分が多々あった。「心のケア」については、保護司だけでなく入所児童も求めている。しかし、入所児童の中には、「サポートの否定的意見」を書いたものもいた。これは、入所児童は施設に入ってから、3ヶ月未満のものも多く、保護司がサポートの必要性に示したように「援助者とのコミュニケーション」を進めていく上で、「内省」を促し、「環境整備」などが整ってくるとまた入所児童の感情も変わってくるのかもしれない。その理由として、入

所児童の中には、サポートについて「特になし」「今のままでいい」といった「現状維持」を回答したものもいた。施設の生活に満足しており、特にサポートの必要性を感じていないともいえる。

これらのことから、大人と少年が求めるサポートには多少の食い違いがあるが、一致している部分は多く、少年が求めている環境や感情を汲み取った対応が保護司を含め我々大人に必要であることが伺えた。

5.4. 総合考察

本研究は横断的研究において、思春期の生徒の発達を検討し、およその発達的な変化を掴むことができたのではないかと思われる。理由として、ソーシャルサポートでは縦断的に行われた先行研究と同じような結果が得られた。これは対象小学校及び中学校が東京都内のある地域に限定されていたからかもしれない。地域差による結果の違いについては否めないだろう。

向社会的行動の出現には、心理的発達により学年によって影響してくるソーシャルサポートの対象者が移り変わるということが分かった。さらには、ストレス反応も向社会的行動に影響し、学年別に変化していく。年齢によるソーシャルサポートの影響による変化を掴み、生徒にとって重要人物を把握できれば、サポート体制も変化させることができる。ストレスについても、成長過程により出現が異なり個人差もあるので向社会的行動に関係してくる小学5年生から中学1年生あたりは注意して様子を見る必要がある。

また非行少年と一般生徒では向社会的行動に与える要因に同異があることが明らかとなった。特に性差や学年差、年齢差の発達は、育ってきた環境によって左右されることが考えられるので、一般生徒で関連が示されても、非行少年には当てはまらないことが予測される。しかしながら、思春

期の少女は非行少年でも共感性の高いと向社会的行動を行うことは同じであった。

保護司が感じる非行少年のサポートでは、心のケアや環境整備について、その重要性が示されていた。それは少年とも意見が一致しており、大人から少年の気持ちを配慮したサポートが彼らに通じる変化を起こすことが感じられた。

ソーシャルサポートが十分に得られているときには、人はストレスフルな状況に良く対処するということが指摘されておりキャプラン(1979)、ソーシャルサポートを感じることによって、ストレスを緩和し、向社会的行動を促進させることも考えられる。思春期の向社会的行動は、他者の影響及び、ストレスの影響が関与することが分かり、これは成長するにして変化する環境が左右しているのではないだろうか。思春期の心理社会的変化が、行動生起に関連していることが分かれば、例え向社会的行動のような思いやり行動を出現できず問題行動ばかりの少年も、別の視点で見守ることができる。心身の成長による違和感があったり、その時期に必要な重要人物のソーシャルサポートが得られなければ、向社会的行動を行うことは難しいと言えるからである。我々大人に求められるサポートは、生徒の環境を把握しそれでいて基本的な発達の変化も理解しておくことが求められるのかもしれない。

[文献]

警察庁生活安全局少年課, 2013, 『少年非行情勢：平成25年上半年期』, 警察庁, <http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/syounenhikoujousei.pdf>, 2013, 8, 8

非行・犯罪研究と向社会的行動研究の接点を探して(日本犯罪心理学会第35回大会発表論文集); (ラウンドテーブル・ディスカッション), 犯罪心理学研究, 1997, 35(特別号), 146-147

荒木田 美香子, 高橋 佐和子, 田代 順子, 2004, 『中学生の精神的健康の変化とその予測的要因--3年間の縦断的調査から』, 学校保健研究, 46(3), 227~241

西村 多久磨, 村上 達也, 櫻井 茂男, 2012, 『小中学生における新たな

- 向社会的行動尺度の作成：向社会的行動の生起場面に着目して』、筑波大学心理学研究, (44) : 79-87
- 岡安孝弘, 嶋田洋徳, 坂野雄二, 1993, 『中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果』, 教育心理学研究, 41(3) : 302-312
- 嶋田洋徳, 岡安孝弘, 坂野雄二, 1992 『小学生ソーシャルサポート尺度短縮版作成の試み』 ストレス科学研究, 8 : 1-12
- 岡安孝弘, 嶋田洋徳, 坂野雄二, 1992, 『中学生用ストレス反応尺度の作成の試み』, 早稲田大学人間科学研究, 5 : 1 : 23-29
- 大山智子, 2004, 『中学生における共感性尺度の検討と日常生活適応感との関連』, 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, 12 : 1-7
- 村上達也, 西村多久磨, 鍋倉正, 2010, 『小中学生における新たな向社会的行動尺度の作成(2) : 状況要因に着目した質問紙の作成(ポスター発表)』日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, (19) : 30
- 二宮克美, 氏家達夫, 五十嵐敦, 井上裕光, 山本ちか, 2009, 『中学生の社会的行動についての研究(64) : 親との関係の知覚などと向社会的行動との関連の縦断的变化』, 日本教育心理学会総会発表論文集. 51 : 622
- 島山和也, 戸田須恵子, 1998, 『小・中学生の向社会的行動・共感性・自己統制力に関する研究』 釧路論集 : 北海道教育大学釧路分校研究報告, 30 : 213-222
- 笠井孝久, 村松健司, 保坂亨, 三浦香苗, 1995 『小学生・中学生の無気力感とその関連要因. 教育心理学研究』, 43(4) ; 424-435
- Buhrmester, D. & Furman, W. , 1987, 『The development of companionship and intimacy』, Child. Development, 58 ; 1101-1113
- 細田絢, 田蔭 誠一, 2009, 『中学生におけるソーシャルサポートと自我への肯定感に関する研究』, 教育心理学研究, 57(3) ; 309-323
- 尾見康博, 1999, 『子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究』, 教育心理学研究. 47(1) ; 40-48
- 富田和巳. 2008. 日本心身小児医学会. <http://www.jisinsin.jp/outline.htm> 2012 11 3
- 中尾睦宏, 2010, 『心身医学とは? : 基礎知識の整理』, 産業衛生学雑誌, 52(1) ; 45-50
- 鈴木公基, 植村みゆき, 2008, 『中学生の物質使用にソーシャルサポートが与える影響』, 関東学院大学人間環境学会紀要, (10) ; 17-32
- 鈴木公基, 桜井 茂男, 2001, 『中学生の問題行動に与えるソーシャルサポートおよび仲間志向性の影響』, 日本教育心理学会総会発表論文集, (43) ; 527
- 桜井 茂男, 1986, 『児童における共感と向社会的行動の関係』, 教育心理学研究, 34(4) : 342-346
- 登張真穂, 2003, 『青年期の共感性の発達 : 多角的視点による検討』, 発達心理学研究. 14 ; 2
- 東京都福祉保健局, 2005, 『東京の児童相談所における非行相談と児童自立支援施設の現状—子どもの健全育成と立ち直り支援の取組—』, <http://www.metro.tokyo.jp/index.htm>, 2012. 3. 15
- キャプラン(著), 1976, 『Support system and community mental health. Behavioral Publications.) Cobb, S. Social support as a Moderator of life stress. Psychosomatic Medicine』, 38 ; 300-314. 近藤喬一・増野肇・宮田洋三郎(訳). 1979